

編纂所だより

大阪市史編纂所(編集)

第55号

大阪市史料調査会(発行)

〒550-0014 大阪市西区北堀江 4-3-2

大阪市立中央図書館内 TEL06-6539-3333

おしおへいはちろう

大塩平八郎の漢詩について

天保8年(1837)に発生し、当時の社会不安を象徴する「大塩の乱」でよく知られた大塩平八郎(中齋)が漢詩を作っていたことをご存じですか。といっても、当時流行の文人趣味とは大きく違う姿勢のものです。大塩は自身の「良知」つまり良心の発露の表現として、漢詩を手段に使ったのでした。大塩の詩文については森田康夫『大塩平八郎と陽明学』に分析があります。いま作品をひとつ取り上げて、鑑賞してみることにしましょう。

独り醒めて… 大塩の作品集『洗心洞詩文』を読むと、私などは「たまらない」という気にさせられます。激烈な感情にみちみちているからです。天保7年、大塩が甲山(現西宮市)に登ったときの2首のうちのひとつを読むことにしましょう。

人随無事醉明時、柔脆心腸如女兒、却衝秋熟攀山險、誰識独醒慎独知

(『洗心洞詩文』上30丁オ、写真)

人は無事に随い明時に酔い、柔脆なる心腸は女兒の如し。

却って秋熟を衝きて山險を攀づ、誰れか識らん 独醒 慎独を知るを

大意はこうです——人は太平の無事にまどろんで心が弱々しい。秋の熟する季節、私はむしろ険しい山に登ろう。私が「独り醒めて」「独を慎んで」いると誰が知っているというのか。

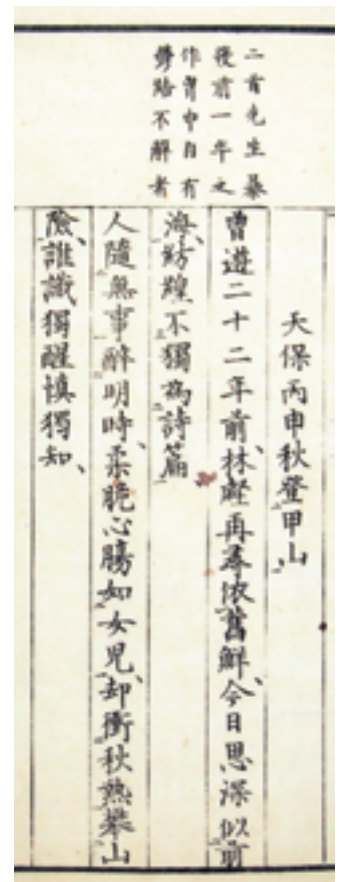
天保のころは内憂外患で江戸幕府の体制が揺らいだ時期です。大坂では天保3年以来の凶作により翌4年に米価が急騰、一度は切り抜けますが同7年米の買占めにより再び飢饉が発生します。買占めを行った豪商、そして大坂町奉行跡部良弼の飢饉対応に激怒した大塩は、跡部の暗殺と豪商の焼討ちを決意します。しかし計画は密告で潰え、大塩は同8年2月19日に挙兵したのでした。

(『新修大阪市史』第4巻)。

危機の感情 この詩は乱にさかのぼる天保7年の秋、「独り醒めて」「独を慎んで」いると語っているのです。

「独醒」とは、中国戦国時代・楚の王族に生まれた屈原(政治家・詩人)の「衆人皆醉へるに我れ独り醒めたり」(漁父辞)——大國秦に滅ぼされようとする楚国の人々への嘆きからきています。また「慎独」は、大塩の理解では誠意の工夫であり、善悪をはっきりとわきまえ、悪を退けて善の側に就くことだと述べています(『古本大学刮目』)。

社会は動揺のさなかにあるにもかかわらず、多くの人々はまだなんとなく太平の世の夢を貪っている。少なくとも大塩にはそう感じられたのでしょうか。そのなかで大塩はひとりごちるのです。この危機的状況を打開するにはどうすれば良いのか。しかし誰も答えてくれる人はありません。ただかつての失意の人、屈原に自分を重ねるばかり。『洗心洞詩文』の編者・中尾捨吉は「胸中自ずから鬱結して解けざる者有り」と大塩の心



『洗心洞詩文』上
(大阪市立中央図書館蔵)

中を察しています。

学者・大塩の立ち位置 上記作品は悲憤慷慨ひふんこうがいが先立っていますが、『洗心洞詩文』を通読してみると、細やかな生活描写を得意とした当時の漢詩の技法をふまえ、鬱屈した慷慨の心情を盛り込んでいます。実は、大塩の句読の師は当代の文人である篠崎小竹しのざきしょうちくの父ですし、小竹や岡田半江おかだはんこう(文人・画家)らとも雅会を開いています。あの頼山陽らいざんようとも風雅の交流がありました(福島理子〈講演録〉「大塩平八郎の詩心」『大塩研究』第76号、〈講演録2〉「大坂をうたう大塩平八郎」同第80号)。

大塩は、当時主流であった文献の理解を旨とする「訓詁くんこ」や、詩文の風流に生きる「詞章ししょう」を視野に入れつつ、敢えて、理想社会の実現を目指す「実学じつがく」を志しました。大塩が大坂に育まれた豊かな学問交流とすぐれた視野のなかから生まれてきた学者であったことは、こうしたところからも窺えます。(小田直寿)

ええもん！ おおさか — 菅笠 —

江戸時代の昔から、大阪には全国に知られた良品がありました。その土地の風土や人びとの暮らしから生み出された産物の数かず一。「ええとこ」には「ええもん」あり！ 選りすぐりの一品イッピンをご紹介します。

下の写真をご覧ください。旅姿の人びとが行きかう通りにかかる、「合羽処かつぼどころ」の看板。お客さんで賑わう店には、雨よけや日よけに欠かせない、菅笠や合羽が並んでいます。今でいうガイドブックの先駆け『撰津名所図会せんつなめいしょくわい』が絵入りで紹介するのは、「深江の菅笠」。深江村(現在の大阪市東成区深江)が生んだ名品です。

大坂はなれてはや玉造、笠を買うなら深江が名所、ヤートコセ、ヨーヤイナー (伊勢音頭)

川に囲まれた低湿地で良質の菅が自生した深江一帯は、千年を超える昔から、笠作りが行われてきました。深江の菅笠は、天皇即位の関連行事・大嘗祭に献納されるなど、古くはもっぱら貴人のためのものでしたが、江戸時代に入ると、あまねく世に供されるようになりました。

「深江」の名を全国に知らしめたのは、寺社詣での旅人たちでした。一生にいく度とない、夢の旅。大坂玉造(二軒茶屋)から大和へ向けて暗越奈良街道を行く伊勢参りの人びとは、その道すがら深江で笠を買い、新たな気持ちで(菅には浄める意味もあった)旅立っていきました。

古くから良品として定評のある深江の菅笠は、『撰津名所図会』などの影響でいつしかブランド化。増える需要に合わせて隣村でも菅が栽培され、その製品はすべて「深江笠」の名で世に知られました。明治もなかば、こうもり傘などに取って代わられるまで、深江の菅笠は人びとの旅のお供をし続けたのです。(白杉一葉)

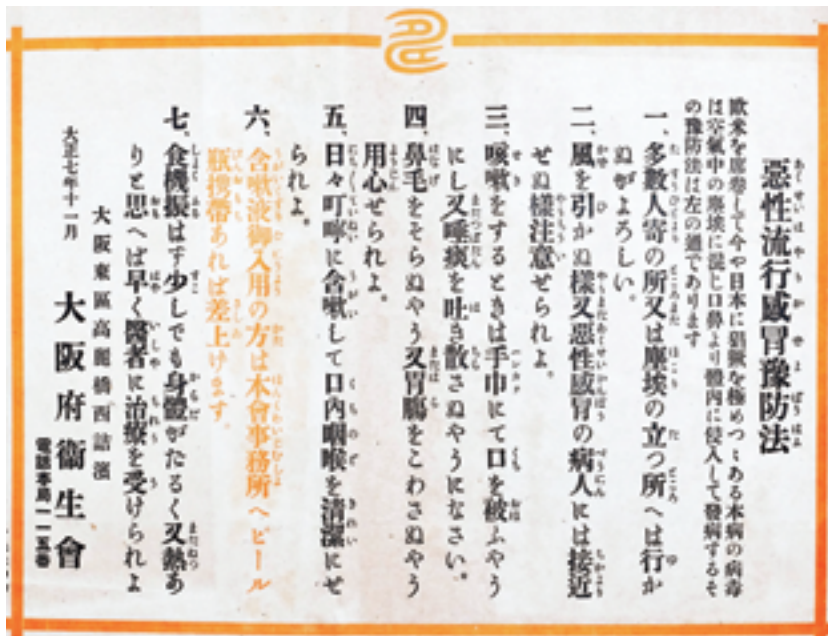


大坂のひがし深江の菅笠ハ
上古より始めて万葉集 延喜式にも見へたり
きさらぎ弥生の頃 難波よりの伊勢参り
新しき菅笠に旅の粧ひ美々しく 長閑なる日に戯れ
つれての旅立ハこよなふうれしきもの也

(左写真の挿入文。読みやすい位置で改行)

流行病の予防策—スペイン・インフルエンザの流行から

うがい 今からおよそ 100 年前の世界では、スペイン・インフルエンザ・ウイルスが猛威を振るっていました。「スペイン風邪」の大流行です。この新型のウイルスは、免疫のない当時の人びとの間で大流行し、全世界で数千万人が死亡しました。日本では、前流行（大正 7 年 10 月～8 年 5 月）、後流行（同 8 年 12 月～9 年 5 月）と、大きな流行が 2 回ありました。死者は合計 38 万人。近年の推計では、45 万人以上にのぼります（内地のみの数値）。



「悪性流行感冒予防法」注意書（井上平兵衛家文書・個人蔵）

さて左の写真は、「スペイン風邪」の死者が急速に増加した大正 7 年（1918）11 月に大阪府衛生会が配布した注意書「悪性流行感冒予防法」です。一般市民が守るべき予防方法が提示されています。各地の衛生組合に伝達され、市民に周知されました。

注意書を一読すると、当時の予防法は、現在の個人でできる新型コロナ・ウイルス対策と基本的に変わらないことがわかります。す

なわち、感染しないためには人込みを避けること、咳をするときはハンカチで口を覆うこと、そしてとくにうがいをすることが奨励されています。費用が少なく済むためか、うがい液が無料で頒布されました（朱字で「うがいすりごにうようかたほんくわいじむしょびんおもちさしあ」とあります）。言わずもがなですが、うがいは現在でも呼吸器系の感染症を予防する有効な手段とされています。

マスク（呼吸保護器） 前流行は大正 7 年 11 月に流行のピークを迎え、いったん終息する気配を見せた後、翌年の 1 月から勢いを盛り返します。すると予防対策として、うがいに加えてマスク（呼吸保護器）の着用が奨励されました。人の多く集まる場所、とくに学校や演芸場・電車ではマスクが肝要とされました。マスクの使用は、後流行のさいには当初より強く推奨されました。感染の予防に有効かつ実行可能な手段とされたようです。

2 枚目の写真は、大阪高等技芸女学校におけるマスクの作製風景です。写真の解説文によると、大阪府衛生会ではマスク 8 万個の製造・頒布（売価 15 銭程度）を予定しましたが、製造が追いつかず、同女学校のほか、茨木の三島高等女学校、天王寺第三尋常小学校、婦人ホーム等に助力を依頼しました。生徒たちは競争しながら製造に励み、帰宅後も家族一同で作ったそうです。

当時、マスクは購入するものでした。しかし在庫不足で市民に行き渡らず、不当な高額販売もはびこったことから、自作が推奨されたり、衛生会などによる製造・廉売が行われました。

写真の中の女性たちは、密集した状態で、マスクもせずに製造に励んでいます。まさに「三密」状態。100 年前のこととはいえ心配になってしまいます。

（中村 直人）



「マスクの製造」（『大阪朝日新聞』大正 9 年 1 月 20 日 夕刊）

編纂所からのお知らせ

◆大阪市修史事業 120 周年 記念企画

○展示

「歴史を未来へ—大阪市修史事業 120 年のあゆみと収集史料」

明治 34 年（1901）、全国に先駆けて始まった大阪市の市史編纂事業は、来年 2 月で 120 年を迎えます。これを記念して、大阪市史編纂所では、事業のあゆみを紹介する展示を行います。大阪市指定文化財も公開。ぜひお越し下さい。

期間 10 月 16 日（金）～11 月 4 日（水）
場所 大阪市立中央図書館 1 階 エントランスギャラリー



▽お問合わせ 大阪市史編纂所 TEL06-6539-3333 最初の『大阪市史』編纂長 幸田成友

○刊行物

『大阪の歴史』第 90 号

【特集】大阪市修史事業一二〇周年記念

〈講演記録〉大阪市史編纂所四〇年の思い出……………堀田暁生
〈大阪市史編纂事業一二〇年を記念して〉……………北崎豊二、前田豊邦、武知京三
植木佳子、堀田暁生、尾崎安啓

大阪・大宮神社の豊国大明神像……………川北奈美
〈研究ノート〉大阪の一「戦争未亡人」の半生について……………小田直寿 本体 700 円 送料実費
〈みおつくし〉呼吸保護器（マスク）……………中村直人 10 月刊行予定

○講演会 大阪市史編纂所セミナー 探そう！大阪市の歴史魅力 第 17 回

「新発見 旭区大宮神社の豊国大明神像について」 講師 川北奈美氏（京都大学大学院）
新たに発見された豊国秀吉像を歴史的に位置づけながら、大阪における秀吉信仰の一端をお話します。

日時 11 月 7 日（土）午後 2 時～3 時（開場 1 時 15 分）
場所 大阪市立中央図書館 5 階大会議室 入場無料 要申込

▽申込・お問合わせ（主催）大阪市立中央図書館 利用サービス担当 TEL06-6539-3302

刊行物のお求め方法

大阪市史編纂所の刊行物は、大阪市史料調査会で窓口・通信販売を行っています。また、下記の書店でお求めいただけます。詳しくは大阪市史料調査会（大阪市立中央図書館 3 階・TEL06-6539-3333）までお問い合わせください。

取り扱い書店— ジュンク堂書店（大阪本店・難波店）
紀伊國屋書店（梅田本店 ※『大阪の歴史』最新刊のみ）

■「編纂所だより」は、年 2 回発行しています。

さまざまな歴史の話題や日々の活動などを、みなさんにわかりやすくお届けする、ニュースレターです。大阪市立各図書館のほか、各区役所、各区民センター、市役所市民情報プラザ、総合生涯学習センター及び各市民学習センター、大阪歴史博物館、大阪城天守閣、住まいのミュージアムなどに置いています。大阪市立中央図書館（3 階大阪コーナー）及び各区の図書館では最新号を常備していますので、カウンターでおたずねください。

■大阪市史編纂所では、ホームページを開設しています。

催し物や刊行物のご紹介をはじめ、今日、大阪でどんな出来事があったかを知る「今日は何の日」、全国の図書館に寄せられた「おおさか」に関する質問にお答えする「みんなの質問」など、市域の歴史に関する情報を発信しています。「編纂所だより」もカラー版で閲覧・ダウンロードしていただけます。ぜひ、ご覧ください！

https://www.oml.city.osaka.lg.jp/?page_id=871 または「大阪市史」で検索してください。 （令和 2 年 9 月発行）